

科学と宗教 そして わたしたちの未来

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

国際基督教大学 (International Christian University)

September 13, 2019

Table of Contents

- ① はじめに
- ② アインシュタイン「科学と宗教」を読む
- ③ いくつかの視点
- ④ わたしたちの未来
- ⑤ おわりに

「科学と宗教」？ トピックについて

To me, the topic "Science and Religion" is ...

わたしの「科学と信仰」に対する基本姿勢

わたしは「真理」（科学的真理、神の御心・指針）といわれるものがあると信じて探求しているが、わたしはそれを得ていないことを確信している。

しかし...

- 宗教（キリスト）を信じるとき、また、信じてからも悩んでいる人が多い
- 宗教は非科学的？ 科学者と信仰者は両立するのか？
- 科学文明、科学・技術の時代には宗教は不要？
- 宗教は民衆のアヘンである。（宗教的幻影に麻痺・依存し社会変革力を失う。）
- キリスト教会（または宗教界）の中の問題
 - 奇跡をどう理解・解釈するのか
 - 創世記 1 章から 11 章をどう理解・解釈するのか
 - 聖書は神のことばであるというとき、それは、何を意味するのか
 - 祈りの答えとしての神の歴史への介入をどう考えるのか

「科学と信仰」？ トピックについて（続き）

Science and Religion?

Continued

講演を依頼されるにあたって

- 何故、科学と宗教は対立するのか？ そもそも対立しているのか？ 対立しなければならないものか？
 - 地動説 vs 天動説、進化論 vs 創造論 (ID 理論)
 - ビッグバン vs 若い地球理論
- 科学と宗教の関係はどうあるべきか？
- 科学の真理と宗教の真理 科学の限界・宗教の限界
- 科学と宗教の類似点・相違点
- 日本人にとっての科学、日本人にとっての宗教
- 何故宗教が大切なのか？

問いをことばに

- ① みなさん、一人ひとりの「問い」を言葉にしながら、受講してください。
- ② 「ひとさま」の迷惑にならなければ、一人ひとり何を信じのも自由？

表題：科学と宗教そしてわたしたちの未来

Title and Contents

- ① アインシュタイン著「科学と宗教」を読む
共通の起点を作る
- ② イアン・G. バーバー著「科学が宗教と出会うとき—四つのモデル」
Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*
課題の整理といくつかの視点
対立 (Conflict)・独立 (Independence)・対話 (Dialogue)・統合 (Integration)
- ③ わたしたちにとっての意味
わたし？ 講演者？ わたしたち？
最近考えていること

アインシュタイン「科学と宗教」

“Science and Religion” by A. Einstein

配布文書の出典

A. Einstein (理論物理学者 1879-1955)

- ① Religion and Science, New York Times Magazine, November 9, 1930
- ② Science and Religion I, Address: Princeton Theological Seminary, May 19, 1939
- ③ Science and Religion II, Science, Philosophy and Religion, A Symposium, 1941
- ④ Religion and Science: Irreconcilable? The Christian Register, June, 1948

和訳と日本語の文書

- アインシュタイン著「晩年に思う」中村誠太郎^a・南部陽一郎^b・市井三郎
訳^c、講談社文庫 (1971) 上記の文書 [2], [3] の部分
- 西島和彦^d 著「アインシュタインと信仰」仁科記念財団

^a理論物理学者 1913-2007

^b理論物理学者 1921-2015

^c哲学者 1922-1989

^d理論物理学者 1926-2009

アルベルト・アインシュタイン

Albert Einstein

略歴

HatenaKeyword から改編

- 1879 年 3 月 14 日、ドイツ・ウルム市に生まれる。
- 1896 年スイス連邦工科大学入学。
- 1902 年、スイス特許局技官に。
- 1905 年 25 歳にて発表した論文（三大論文：『光量子仮説』『ブラウン運動理論』『特殊相対性理論』Annalen der Physik 誌 (17 号)）が世界を驚かせた。
- 1916 年、ドイツ・ベルリン大学教授時代に「一般相対性理論」完成。
- 1922 年、ノーベル物理学賞受賞、来日。
- 1933 年ヒトラー政権成立の年、ナチによる迫害を逃れ米国へ。プリンストン高級研究所などで研究生活を送る。第二次世界大戦ののち、自己の理論が、マンハッタン計画、原子爆弾へとつながったことを重く考え、科学の平和利用のための言論も行う。
- 1955 年 4 月 13 日、以前から分かっていた腹部大動脈瘤が破裂し出血が始まったが手術拒否。
- 1955 年 4 月 18 日、プリンストン病院で死去。享年 76 歳。

Religion and Science (1930)

What is religion? What is behind it?

- ① Everything that the human race has done and thought is concerned with the satisfaction of deeply felt needs and the assuagement of pain.
 - With primitive man it is above all fear that evokes religious notions
- ② The desire for guidance, love, and support prompts men to form the social or moral conception of God.
 - The anthropomorphic character of their conception of God.
- ③ Cosmic religious feeling Democritus^a, Francis of Assisi^b, and Spinoza^c
 - Individual existence impresses him as a sort of prison and he wants to experience the universe as a single significant whole.
 - I maintain that the cosmic religious feeling is the strongest and noblest motive for scientific research.

A contemporary has said, not unjustly, that in this materialistic age of ours the serious scientific workers are the only profoundly religious people.

^aBC460?-BC370?

^b1181?-1226

^c1632-1677

「科学と宗教 I (1939), II (1941)」

科学とは・宗教とは

科学と宗教 II

- 科学とは、組織的な思索を展開して、この世界の知覚しうる諸現象を、できるかぎり徹底的な一つの連合にもちきたそうとする、数世紀を年経た努力
- 科学とは、概念化という過程によって、後から存在を再建しようとする試み
- 宗教とは何か？

宗教の目標

科学と宗教 I

（ユダヤ・キリスト教の宗教的伝統の中にあたえられている我々の抱負の最高の原理）個人を自由^aに、そして責任ある発展をさせ、その結果、個人が諸能力を、全人類のために自由に喜んで奉仕させるようにすることです。

^a何からの自由？ 責任ある発展をさせるもの？ 全人類のため？

宗教的人格

科学と宗教 II

私に宗教的だという印象を与える人がもっている抱負の特徴

- 自己の能力のあたうかぎり、自己的な欲望の拘束から自らを解き放ち、超個人的な価値のために執着している思想、感情、抱負に余念が無い人
- この超個人的内容の力強さと、その圧倒的な意義に対する確信の深さ
- その内容を神と結びつける試みがなされているかどうかは、問題ではありません。(e.g. 仏陀やスピノザ^a)

^aBenedict de Spinoza, Hebrew forename Baruch, Latin forename Benedictus, Portuguese Bento de Espinosa, (born November 24, 1632, Amsterdam—died February 21, 1677, The Hague), Dutch Jewish philosopher, one of the foremost exponents of 17th-century Rationalism and one of the early and seminal figures of the Enlightenment. His masterwork is the treatise Ethics (1677). <https://www.britannica.com/biography/Benedict-de-Spinoza/The-period-of-the-Ethics>

現代の危機

科学と宗教 I

- 全体主義的諸国家においては、人間性の精神を実際に破壊しようと努めているのは、支配者自身なのです。まだそれほどの脅威にさらされていない国々では、そのもっとも貴重な伝統を閉塞させようとしているのは、国家主義と頑迷、また経済的手段による個人的抑圧なのです。

宗教と科学の違い

科学と宗教 II

- 宗教とは、これらの価値や目標を明瞭に完全に意識し、その効果を間断なく強化し、拡大しようとする人類の年経た努力
- 科学は、こうあるべきだということではなくて、こうであるということを確認するにすぎないし、科学の領域外では、あらゆる種類の価値判断が依然として必要
- 宗教は、人間の思想と行動との評価のみを問題とします。宗教は、事実や事実間の関係について、正当に語ることはできません。
- 「聖書に記されたあらゆる言明が、絶対に真実である」干渉が起こると紛糾が起こる
(e.g. ガリレオやダーウィンの説)

対立 vs 独立

- なぜ、紛糾が起こるのでしょうか。

合理的立場の弱点

科学と宗教 I

- 我々の行為や判断に必要であり、またその基準となるさまざまな確信は、その堅固な科学的方法によってのみ見いだしうるものではない点です。というのは科学的方法は、諸事実が相互にどのように 関係し合っているか、また相互にどのように条件付けられているか、ということ以上には何物をも教えることができないからです。

相互依存性

科学と宗教 II

- 宗教は目標を決定するものではありませんが、それが設定した目標達成に、どのような手段が役立つかということをもっとも広い意味で科学から学びました。
- 科学は、真理と理解に対する熱望を徹底していただいている人々によってのみ創造されます。しかしその感情の源泉は、宗教の分野から派生するのです。
- 存在の世界に妥当する諸規則は合理的である、すなわち理性によって理解しうるのだ、という可能性への信仰もまた、宗教の分野に属します。
- すなわち、宗教なき科学はびっこであり、科学なき宗教はめくらなのです。
Science without religion is lame, religion without science is blind.

全能で正義の人格神という存在の矛盾

科学と宗教 II

- その神々は、自らの意志を働かせて、現象の世界を決定したり、あるいはそれに影響をあたえるものと考えられたのです。人間はその神々の気質を、呪術や祈祷によって思い通りに変えようとしてきました。
- その擬人的な性格は、例えば人々が、祈りの中で神に訴えたり、自分の願望をかなえて下さいと嘆願する事実に示されています。
- もし神が全能であれば、あらゆる人間の行動、思想、感情、抱負をも含めたすべての出来事が、やはり神のみ業であるということになり、そうだとすれば、そのような全能の存在の前に、人間が自らの行為や思想に責任を負わねばならないとは、どうして考えることができるのでしょうか？
- 神が処罰や報償を行われる時には、ある程度まで神は、自分自身に審判を下していることになりましょう。このようなことは、神に帰せられている善良と正義ということと、どうして宥和させることができるのでしょうか？

擬人化された神・全能の神

問題提起

- 人間の祈りに応答される神
 - 全能の神 vs 人間の責任
- 呪術や祈祷による人間の介入
神の義の問題

科学的諸法則

科学と宗教 II

- 時間と空間における対象と出来事との、相互関係を決定する一般的諸規則を確立するのは、科学の目的です。
- 自然の諸法則には、絶対に一般的な妥当性が要求されます。がそれは証明されはしないのです。
- 原理的にそれが成就される可能性への信仰は、部分的な成功に基づいているにすぎません。
- ごく少ししか把握していないとしても、その諸法則を基礎として、我々がある領域の諸現象の一時的あり方を、非常な精密さと確実さで予測することができるのです。
 - e.g 太陽系に属するさまざまな惑星の軌道 etc
 - 天候という分野におけるさまざまな出来事は、精密な予測の埒（らち）外にあります。なぜならそれは、自然に秩序が欠けているからではなく、作用している諸因子が種種雑多であるからです。
 - 生物の領域: 欠如しているのは、秩序そのものの知識ではなくて、該博な一般性をもった関連の把握

科学の限界？ 帰納的手法・パラメーターの数

- 科学の範疇でありながら「精密な予測が不可能」なものの存在

秩序ある規則性をもたない領域？

科学と宗教 II

- あらゆる出来事の秩序ある規則性をより多く感じれば感じるほど、異なった性質の諸原理からこの秩序ある規則性をもたない、といった領域は存在しないという確信はますます強固になります。この確信をもった人にとっては自然の出来事の独立した原因としての人間の支配、あるいは神の支配、というものは存在しないでしょう。
- 人格神が自然の出来事に干渉しているという教義は、科学によって真の意味で反駁されたことはけっしてありません。
- その教義は、科学的知識がまだ足をふみいれなかった諸領域へ、つねに避難することができる
- 明るい光の下ではなく、暗がりの中においてのみ自らを主張しうるような教義は、必然的に人類に対する効果を失い、人間の進歩に測り知れない害毒を及ぼすだろうから
- （他に重要なすべきことがある）人間性そのものにおける、真、善、美を育成しうるさまざまな力を、自らの職分として活用しなければならないでしょう。

科学の宗教の目的への寄与

科学と宗教 II

- 自己中心的な執着、欲望、恐怖の絆から、できるかぎり人類を解放することが、宗教の目標の一つであるとすれば、科学的推理はまた別の意味で、宗教を助けることができます。
- 科学の領域において、立派な進歩をなしとげた強烈な経験をもつすべての人々は、存在の中に明らかにされた合理性に対して、深い畏敬をいだくものなのです。
- 人間の精神的進化が進めば進むほど、真の宗教性への路は、生や死に対する恐怖とか盲目的信仰に通じているのではなく、合理的知識への努力に通じていることが、ますます確実となるように思われます。この意味で私は、僧侶が自らの高邁な教育的使命を果たそうとするならば、教師にならなくてはならないと信じています。

対話、目指す方向？ 統合？

- 科学と宗教がよい関係を保ちながら発展していく道がある。
- 真の宗教性への路は、合理的知識への努力に通じている？

イアン・G. バーバー著「科学が宗教と出会うとき」

Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*

本書について

hsuzuki's homepage より

著者は1923年生まれ。アメリカの物理学者・キリスト教神学者。中国で宣教師の子として生まれ、イギリスを経て、アメリカへ。シカゴ大学で物理学者フェルミの助手を務め、1950年物理学の博士号を受ける。1956年には、イエール大学から神学博士の学位を受け、カールトン大学で物理学と宗教学の両学部で教える。訳者は、国際基督教大学キリスト教と文化研究所非常勤研究員。

科学と宗教の問題をそれまでの対立と独立の考え方だけでなく、対話と統合を加えた四つのモデルでとらえ、天文学と創造（第二章）、量子物理学が意味すること（第三章）、進化と継続する創造（第四章）、遺伝学、神経科学、および人間の本性（第五章）、神と自然（第六章）とかなり広い範囲において四つのモデルに分けて語っている。

よくまとまっているが、その広さの故に、訳者も読者であるわたしも十分理解できているかは不明である。少しずつ学びを深めたいと思う一方、この分野がこのように学問的に語られると、数学と数学基礎論の関係のように、科学と宗教とも異なる1分野、おそらく、科学哲学の1分野という位置づけとなり、人間としての自然な疑問からは、少し離れてしまっているようにさえ感じる。学問とは、そのようなものなのだろう。

Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*

Introduction

G. Bishop, The Religious Worldview and American Beliefs About Human Origins

- Forty-five percent of Americans believe that “God created man pretty much in this present form at one time within the last 10,000 years.”
- Forty percent believe that “man developed over millions of years from less advanced forms of life but God guided the process.”
- Ten percent believe that God had not part in the process.
- In other advanced industrial nations the fraction who take the Bible literally and reject evolution is far lower – only 7 percent in Great Britain, for example.

<https://ropercenter.cornell.edu/sites/default/files/2018-07/95039.pdf>

この数字をどう思いますか。

- アメリカはかなり特殊？ 他の国の人達はどうなのだろうか？
- 日本も特殊かもしれない。

Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*

Typology: Conflict, Independence, Dialogue, Integration, Part I

Conflict

- Biblical literalists believe that the theory of evolution conflicts with religious faith.
- Atheistic scientists claim that scientific evidence for evolution is incompatible with any form of theism.

These two opposing groups get most attention from the media, since a conflict makes a more exciting news story than the distinctions made by persons between these two extremes who accept both evolution and some form of theism

Independence

- Science and religions are strangers who can coexist as long as they keep a safe distance from each other.
- Science asks how things work and deals with objective facts; religion deals with values and ultimate meaning.

Conflict arises when religious people make scientific claims, or when scientists go beyond their area of expertise to promote naturalistic philosophies.

Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*

Typology: Conflict, Independence, Dialogue, Integration, Part II

Dialogue

- A comparison of the methods of two fields.
- At limit-questions, for example, why is the universe orderly and intelligible.
- God can be conceived to be the determiner of the indeterminacies left open by quantum physics, without any violation of the laws of physics.

Both scientists and theologians are engaged as dialogue partners in critical reflection on such topics, while respecting the integrity of each other's fields.

Integration

- The natural theology has sought in nature a proof, or at least suggestive evidence, of the existence of God, for example, the physical constants at the Big Bang.
- Theology of nature: reformulation of a particular religious tradition in the light of science.

The author's sympathies lie with Dialogue and Integration, especially a theology of nature and a cautious use of process philosophy.

アインシュタインの論考とバーバーの4つの視点

ここまでのまとめ

- 科学と宗教を「対立」という軸だけで考える必要はない。
- 科学と宗教を「独立」または「相補的なもの」として捉えることもできるが、対立も生じうる。
- アインシュタインは、既存の宗教を信じているわけではないが、神の存在を認め、独自の宗教観をもっているだけでなく、それが、科学者としての探究心を支えているようである。
- バーバーは「対立」「独立」以外の軸を模索しているが、明確な答えがあるかは不明。
- どのような「対話」が可能なのだろうか。

個人的な感想

- わたしも、おふたりに敬意をもちつつ、さまざまな方々と、対話を続けたい。
- わたしが、求めている「真理」の方向性とは、すこし異なる気がする。

「ひと」とは？ 「いのち」の尊厳とは？

「中学生からの大学講義3 科学は未来をひらく」筑摩書房

- チンパンジーとヒトの遺伝子の違いは、5パーセント程度、600万年前までは同じ生き物で、ホモ・サピエンスは20万年前に出現、チンパンジーとの明らかな違いは、前頭前野の発達（チンパンジーの脳380cc、人間1400cc）。前頭前野は「自分を客観的に見る」感覚を司っているという。「他者の気持ちを読み、力を合わせて共同作業をすること」。（長谷川真理子）
- 『脳死』『脳始』の線引がされるようになったのは、先端医療にとって都合だからだ。脳が死ねば、その時点から死体とみなされ、臓器を取り出せる。一方、脳始に至っていない状態は細胞の塊だから、再生医療に使う材料をえることができる。まだ、人ではないから殺人にはあたらないというわけだ。結局のところ、先端医療はわたしたちの寿命をのばしているわけではなく、むしろ両側から縮めているわけだ。脳が始まるずっと前から動的平衡としての生命は始まり、脳が死んでもまだ動的平衡は止まらない。生命の始まりと終わりを決めるのは、本当は非常に難しいことなのだ。脳死と脳始のような考え方は、機械論的生命観がはらんでいる問題とも言える。（福岡信一）

いろいろな問いと関係がありそうですが、...

- 科学の問い？ 宗教の問い？

NHK NEWS WEB: 4 か月間脳死状態の女性が出産 延命治療と親族の支えで

チェコで妊娠 16 週目で脳出血を起こして脳死状態となり、延命治療を受けていた女性が、およそ 4 か月後の先月、女の子を無事に出産したと病院が発表しました。

チェコの第 2 の都市、ブルノにある大学病院は、脳死の判定を受けた 27 歳の女性が、先月、妊娠 34 週目に入り、帝王切開で女の子を出産したと発表しました。この女性は、妊娠 16 週目のことし 4 月、脳出血を起こして脳死の判定を受けましたが、胎児が安定した状態になるまで女性の子宮の中で育てることになり、病院は 117 日間にわたって、女性の心臓や肺などを人工的に動かす延命治療を続けました。また、看護師らは、胎児が健康に育つようと、女性の足を動かして歩く動作を再現したり、おなかの中の胎児に語りかけたりしたほか、女性の親族は、胎児におとぎ話しを読み聞かせたりしていたということです。

現地からの報道では女の子は生まれたとき、体重 2130 グラム、身長 42 センチの元気な赤ちゃんで、今は、父親や祖母らと一緒にということです。

出産を終えた女性は、夫や親族らにみとられながら延命治療を終えたということで、病院側は記者会見で「親族が一丸となって見守ってくれた。親族のサポートや関心がなければ、成功はできなかった」と話していました。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20190903/k10012062281000.html>

人工中絶

2017（平成 29）年度 164,621 件

厚生労働省：平成 29 年度衛生行政報告例の概況

「＜死＞の臨床学―超高齢社会における『生と死』」村上陽一郎著、新曜社

我が国の刑法には堕胎罪があるが、その適用除外の措置として、母体保護法が存在する。受胎後一定期間（法律上は『胎児が、母体外において、生命を継続できない時期』としか定めがないが、厚労省の次官通達によって、現在の取り決めでは 22 週未満）は、中絶が許されるわけだが、容認されるのは 2 つの場合に限られる。第 1 は、妊娠の継続が、母体の健康、もしくは、経済状況に顕著な障害となる場合であり、第 2 は暴行など、本人の意志に反する強制的な妊娠である場合である。『経済的理由』は、『貧乏人の子沢山』などという言葉が実質的な意味を持っていた、戦争直後極めて貧しい状況にあった頃の日本社会において、必要とされた条項であるが、それが未だに残っているのは、この条件を外すと、現在日本で行われている人工中絶のほとんどが、違法になるからである。言い換えれば、胎児異常が見つかって、両親が中絶を決意したときにも、中絶の合法性の根拠は、この経済条項しかない、という極めて欺瞞的な事態にある。」（p.42）

あなたはどのように考えますか。

- 「産む」「産まない」を決めるのは女性の権利？
- 男性の責任はどのように法的に問われるの？

ヒトの定義・ヒトの死

長谷川真理子のヒトの定義：「中学生からの大学講義3 科学は未来をひらく」

- ① 脳が大きく、大人は複雑な文化的行動をとる。
- ② 分業し相互扶助する社会を形成。
- ③ 子どもが一人前に成長し、社会の輪の一つになるまでに時間がかかる。
- ④ こどもの生産と文化の継承という2つの柱がある。

「＜死＞の臨床学ー超高齢社会における『生と死』」 村上陽一郎著、新曜社

- 如何に自らの遺伝子が保続プログラムを持ち、(中略)連続性のプログラムに従っているにしても、なお、人間は自らの死ということを、決定的な不連続のように解釈することになっている。それは『体質』が滅びることだけではなく、一人の人間の意識、想念、感覚、意志、技能などが、死によって断絶するという、死の理解によって支えられた、抜き難い発想があるからであろう。(p.89)
- 死によって生まれる非連続性、断絶を乗り越えようとする、このような(死を知る)人間の二次的な生産物の相対を、わたしたちは『文化』とよぶのではないか。言い換えれば、文化は、『死』のなかから生まれてきたことになる。(p.90)

わたしたちの未来

For Our Future

科学的な問い・宗教的な問い

最近考えていること

- 社会は、永続的ではなく、非常に速いスピードで変化している。それが定常状態だと受け入れなければいけないのかもしれない。
- いくつかの限られた数の変数、または、普遍的な価値、変わらない（不変な）ものをさがして、それを拠り所とするのは、むずかしいかもしれない。
- 共有するメディアがないなかで、わたしたちは、どのように、たいせつなものを共有することができるのだろうか。
- 動的なもの、変動するものに、目をむけ、達し得たところにしたがって、ていねいに合意を形成していきたい。
- ひとの尊厳とは、いのちとは、いのちを生きるとは。
- たいへんな状態にあるひとたち、たとえば、不登校、発達障害、差別を受けているようなひとたちがどうにかしなければ、いけない世界ではないはず。

変化し続けている世界

- 普遍的な哲学や宗教に解をもとめるのではなく、自分に対しても、相手に対しても、達し得たところに従って生きることを是とし合意を形成しながら。

学ぶこと・信じること

Learning and Believing

なぜ？ Why?

- なぜ、学ぶ（研究する）のか？
- なぜ、信じるのか？

わたしは、なぜ、学ぶ（研究する）のか？

- 真理を手にしていないから。
- 自分の中に解決策・こたえがないから。

わたしは、なぜ、信じるのか？

- 真理を手にしていないから。
- 自分の中に解決策・こたえがないから。

わたしの「科学と信仰」に対する基本姿勢

[再掲]

わたしは「真理」（科学的真理、神の御心・指針）といわれるものがあると信じて探求しているが、わたしはそれを得ていないことを確信している。

わたしが求めていること

わたしの信仰とは

価値判断が困難な世の中で生きていく中で、方向を指し示してくれるものを求めているのであって、それが絶対正しいということの保証を求めているのではない。

対立が起こるのは

達し得たところのものが、間違っていないという保証を求めるから？

ヨハネ 13:34, 35

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

ローマ 12:15

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

わたしが達し得たところ

指針として生き、ともに、求めていきたい

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共になきながら、一人ひとりを、そして互いに愛（ἀγαπάω, Welcome）し合いながら生きていく未来をめざしたい。

コメント

問い

- みなぎそれを求めても、矛盾することなく成り立つ世界を求めていたい。
- 完璧なルールを探すことよりも、合意の形成を求めるプロセスがたいせつなのではないだろうか。
- 自分のいのちを、所有物と考える世界ではなく、ともにいのちを生きる世界を求めているのかもしれない。
- だれかが頑張って作り上げるものではないだろう。
- あるスケールで、長い時間たもたれることは、主要な要件にしなくてよいのかもしれない。
- AI が普及していく世界で、一番心配なのは、ほとんどのひとたちが、考えなくなること。考えることを、だれかに、または何かに任せてしまうこと。
- 考えなくなりつつあるひとたちも、Welcome しながら生きていく世界とは？

参考文献

References

- ① 「コペルニクス-人とその体系」アーサー・ケストラー著、有賀寿訳、すぐ書房（0023-2000001-3739, 1977.10.20）
- ② 「科学的自然像と人間観—現代において宗教は可能か」P.M. マッカイ著、池田光男、有賀寿訳、すぐ書房（0023-200038-3937, 1978.9.5）
- ③ 「進化をめぐる科学と信仰～創造科学などを考えなおすわけ」大谷順彦著、すぐ書房（ISBN4-88068-281-0, 2001.4.5）
- ④ 「人間にとって科学とは何か」村上陽一郎著、新潮選書、新潮社（ISBN978-4-10-603662-0, 2010.6.25）
- ⑤ 「奇跡を考える—科学と宗教」村上陽一郎著、講談社学術文庫 2259、講談社（ISBN978-4-06-292269-2, 2014.12.10）
- ⑥ 「中学生からの大学講義 3 科学は未来をひらく」桐光学園+ちくまプリマー新書編集部・編、筑摩書房（ISBN978-4-480-68933-7, 2015.3.10）
- ⑦ 「分かちあう心の進化」松沢哲郎著、岩波科学ライブラリー 273（ISBN978-4-00-029674-8, 2018.6.14）
- ⑧ 参考：Developing a Christian Mind at Oxford: <https://dcmoxford.org>

ご静聴ありがとうございます
Thank You for Listening!

みなさんに考えていただきたいこと

コメント・質問があれば

コメントシート

何でも。できるだけ、応答させていただきます。別に、個人的に、時間をとっても構いません。

ディスカッションのために

- アインシュタインの「科学と宗教」から学んだこと
- アインシュタインの「科学と宗教」から得た問い
- 自分にとっての「科学と宗教」の問い
- 「科学と宗教」の問題として、議論すべきこと
- 科学と宗教とわたしたちの未来